

目と瞼の対人魅力

— 一重瞼と二重瞼に関する意識の変遷 —

Single Eyelids vs. Double Eyelids

Changes of Views about Facial Attractiveness with Eyes among Japanese Women

山田 雅子

YAMADA Masako

Japanese young women often mention to conditions of eyes as a criterion of a beauty. Their ideals are big bright eyes. In the West, however, there's another model of beauty with eyes with long slits at the outer corners with no fold. The features are very Oriental, mystic, and attractive in Western culture.

We did a research on views about eyes and eyelids of Japanese young women of college age. Then, it was clear that about 70% of respondents had double-eyelids and that about 20% of them had eyelids with no fold. But almost all the members chose double-eyelids as their ideal. Furthermore, they expected both male and female preferred eyes with double-eyelids to that with no fold.

In Japan, the views about beauty of eyes have changed dramatically. Japanese were in awe of Westerner, and photography was developed in Meiji era, so traditional model of beauty were taken the place by new ideal type. From Taisho era to the early days of Showa era, big bright eyes with double eyelids were taken notice as an element of beauty. In this age of Internet, our surroundings of information are completely different from those days. We can catch various enormous information everyday and we know that there are various opinions around the world. But Japanese young women were prejudiced in impression of eyes; eyelids with no fold look stern or double-eyelids are cute. The phenomenon could be caused by the today's Japanese sense of values that immature was good and desirable.

1. 一重瞼と二重瞼をめぐる

目は、人の顔の中でも最も注目を集める部分である。人の視線を解析した結果によっても、この事実は明らかであるが¹⁾、これは実際の感覚にも大きく相違するものではなからう。我々の目は、何よりも相手の目に注意を誘われている。

こうした日常的な注目のみならず、若い女性達は美しさの要素として目の存在を重視してもいる。2008年に行った調査においては、「美人」の要素として約7%（第7位）の対象者が目に関する事項を挙げた他、外見的な美しさの要素も約9%（第8位）が目に関わるものだったという結果がある²⁾。この数値は多くないと捉えられかねない数値ではある。だが、他の回答が顔全体やプロポーション、肌、努力やオーラ、メイク、身だしなみ、清潔感といった、より全体的で包括的な内容であったことを考えれば、目という局所的なポイントが大きな存在感を以て捉えられていることを指摘しないわけにはいかない。

さて、その目の美しさとはどのようなものであろう。しばしば登場するのは、その大きさである。前述の調査においても、大きくぱっちりとした目が美しいとされた³⁾。大坊（1991）による調査でも、目が大きく、唇が小さく、鼻の小さい顔が魅力的とされたとの報告がある³⁾。更には、海を越えたアメリカにおいても女性の容貌部位の特徴と魅力との関連が調べられている。ここでもやはり、大きな目は魅力に繋がる要素の一つであることが明らかとなっている⁴⁾。

しかし、美の基準はこれに留まらない。ハリウッド女優の活躍や、世界的なミスコンテストの受賞者を見れば、必ずしも大きな丸い目が魅力的ということではなさそうである。世界の人々がアジア系の黄色人種に向ける美的価値観では、切れ長の細い目、特に一重瞼の目が持つ、オリエンタルで神秘的な雰囲気好まれる傾向も少なからず見られる。すなわち、一部の黄色人種には、「大きな目」の他に、一重瞼の美という方向性が拓かれているのである。

それにもかかわらず、昨今の日本では、一重瞼を二重瞼にするための化粧品や二重瞼にする美容整形等、一重を二重にするという作用の方向性のみが目立つ。反対に、二重を一重にする方法、或いは二重を一重に見せる方法については全く情報が無い。では、若い日本人女性は、目や瞼が持つ対人的な魅力をどのように捉えているのであろうか。本稿では女子学生を対象に行った調査の結果を紹介し、目と瞼に対して女性達が持つ美意識の変遷とその背景について概観する。

2. 目と瞼に対する意識～女子学生に対する意識調査～

若い日本人女性が持つ目や瞼に対する価値観を捉えることを目的とし、女子学生を対象に次のような調査を行った*。

2.1. 調査対象

関東在住の日本人女子短期大学生84名（1、2年生混合）

2.2. 調査時期

2010年6月

2.3. 調査内容

- ①右目、左目それぞれの瞼のタイプ（一重／二重／三重以上から選択）
- ②理想の瞼のタイプ（一重／二重から選択）
- ③女性が一般的に好む女性の瞼のタイプ（一重／二重から選択）
- ④男性が一般的に好む女性の瞼のタイプ（一重／二重から選択）
- ⑤一重瞼の女性のイメージ（自由回答、複数回答可）
- ⑥二重瞼の女性のイメージ（自由回答、複数回答可）
- ⑦顔に関する悩みの所在（自由回答、複数回答可）
- ⑧メイクテクニックを知りたい部分（選択、複数回答可）

2.4. 結果及び考察

2.4.1. 実際の瞼のタイプ

実際の瞼が一重であるか、二重であるか尋ねた結果は、次の Table 1 のようになった。括弧内の数値は、対象者84名に占める割合を示す。

本結果において特筆すべきは、全体として二重瞼との回答が多くを占めたことである。1979年の調査においては、55.4%が一重瞼、33.0%が二重瞼であったとの結果が示されているが⁹⁾、それから30年余りを経た本調査では、右目だけを見れば約2/3の女性対象者が二重瞼という状況

*調査の実施にあたり、大久保悠子氏よりご協力頂きました。ここに記して深謝申し上げます。

Table 1 実際の瞼のタイプ

	右目	左目
一重	17 (20.2%)	21 (25.0%)
二重	64 (76.2%)	56 (66.7%)
三重以上	1 (1.2%)	2 (2.4%)
無回答	2 (2.4%)	5 (6.0%)
合計	84 (100.0%)	84 (100.0%)

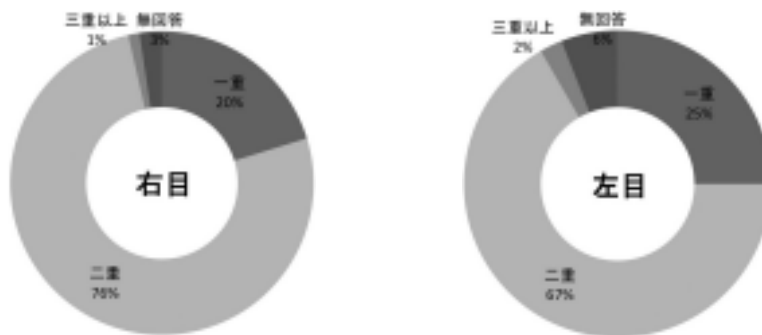


Figure 1 実際の瞼のタイプ (右目・左目)

に変化している。当該変化は、目の化粧を重視し、目を強調したメイク方法が発達してきた過程と重なるとも言える。だが、美容整形等の手術が行われていない限り、30年間という短い期間での変化としては非常に急激なものとも捉え得る。

2.4.2. 自分自身の理想と一般に求められる理想

Table 2には、対象者自身が理想とする瞼のタイプや女性に好まれると予想されるタイプ、男性に好まれると予想されるタイプの回答を集計して示した。括弧内は全体に占める割合である。尚、表中には「一重・二重」との区分があるが、選択肢として予め用意したのではなく、調査者の指示に反して二つが選択された結果として生じたものである。

何れの結果においても、二重瞼がほぼ全体を占める状態となっており、瞼に対する美的価値観の方向性は非常に偏っていることが分かる。自分自身を含め、女性に求められる瞼のタイプは、判断する側の性別に関係なく、二重であろうとの予想がなされている。まさに二重瞼に占められた価値観であり、一重瞼の存在感は全くといって良い程感じられない結果となった。

Table 2 理想の顔のタイプと好まれる女性の顔のタイプの予想（対女性・対男性）

	自分自身の理想	女性に好まれる 女性の顔のタイプ	男性に好まれる 女性の顔のタイプ
一重	0 (0.0%)	0 (0.0%)	0 (0.0%)
二重	83 (98.8%)	84 (100.0%)	82 (97.6%)
一重・二重	0 (0.0%)	0 (0.0%)	1 (1.2%)
無回答	1 (1.2%)	0 (0.0%)	1 (1.2%)
合計	84 (100.0%)	84 (100.0%)	84 (100.0%)



Figure 2 理想の目／好まれると予想される顔のタイプ（女性・男性）

2.4.3. 顔によるイメージの違い

Table 3およびTable 4には、一重顔の女性と二重顔の女性のイメージとして回答された言葉の集計結果を示した。複数回答を認めたため、何れも全体で84件を超える回答数となっている。尚、括弧内に示した割合は、84名の全対象者における回答の出現率である。

二つのタイプの大きな違いは、肯定的・評価的イメージが支配的か、否定的・批判的イメージが支配的かという点である。一重顔の女性のイメージとしては、「きつい (27.4%)」を筆頭に否定的な言葉が続き、5番目の「きれい (9.5%)」まで肯定的な言葉は現れない。一方、二重顔の女性に対しては、回答者の半数以上が「可愛い (53.6%)」と答えており、明瞭に否定的な回答は「濃い」「派手」といった単数の意見のみに留まった。

ここで注意すべきは、本調査がイメージ写真や似顔絵等を示したものではないということである。具体的な姿なしに、これだけのイメージの共有が見られたことは、一重顔や二重顔という局所的な要素に対して強い先入観が広く持たれていることを示すものである。

Table 3 一重瞼の女性のイメージ (自由回答)

回答内容	度数	回答内容	度数
きつい	23 (27.4%)	美人	1 (1.2%)
小さい	11 (13.1%)	かわいい	1 (1.2%)
細い	10 (11.9%)	のっぺり	1 (1.2%)
怖い	9 (10.7%)	はっきりしていない	1 (1.2%)
きれい	8 (9.5%)	目つきが悪い	1 (1.2%)
腫れぼったい	5 (6.0%)	冷たい	1 (1.2%)
重い	5 (6.0%)	化粧が大変	1 (1.2%)
大人っぽい	4 (4.8%)	なごむ	1 (1.2%)
するどい	4 (4.8%)	静か	1 (1.2%)
クール	3 (3.6%)	大人しい	1 (1.2%)
かっこいい	3 (3.6%)	つぶらな瞳	1 (1.2%)
ぼんやり	3 (3.6%)	切れ長	1 (1.2%)
暗い	3 (3.6%)	強い	1 (1.2%)
きりっとしている	2 (2.4%)	男らしい	1 (1.2%)
眠い	2 (2.4%)		
うすい	2 (2.4%)		
素朴	2 (2.4%)	合計	113 (134.5%)

Table 4 二重瞼の女性のイメージ (自由回答)

回答内容	度数	回答内容	度数
可愛い	45 (53.6%)	華やか	1 (1.2%)
大きい	19 (22.6%)	ふわふわ	1 (1.2%)
ぱっちり	10 (11.9%)	やわらかい	1 (1.2%)
やさしい	10 (11.9%)	目立つ	1 (1.2%)
明るい	9 (10.7%)	濃い	1 (1.2%)
きれい	6 (7.1%)	派手	1 (1.2%)
はっきり	3 (3.6%)	化粧をするのが楽しそう	1 (1.2%)
くつきり	3 (3.6%)	童顔	1 (1.2%)
美しい	3 (3.6%)	子供っぽい	1 (1.2%)
女性らしい	3 (3.6%)		
愛らしい	2 (2.4%)		
化粧しやすい	2 (2.4%)		
まるい	2 (2.4%)	合計	126 (150%)

2.4.4. 顔の悩みとメイクのテクニック

顔に関する悩みについて自由回答を求めた結果は、次の Figure 3 のようになった。

悩みを持つ箇所として最も多く挙げたのは「鼻 (41.7%)」であり、次いで「目 (33.3%)」、「肌 (27.4%)」、「輪郭 (24.2%)」と続いた。

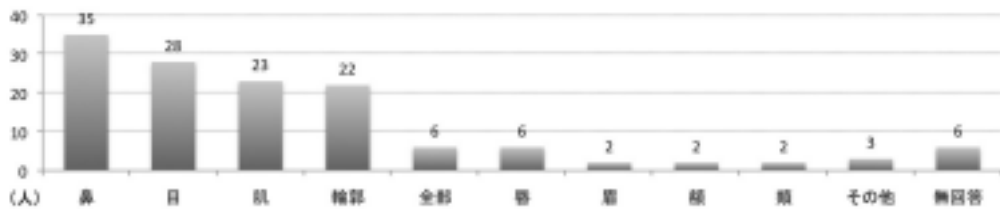


Figure 3 顔に関する悩み (自由回答)

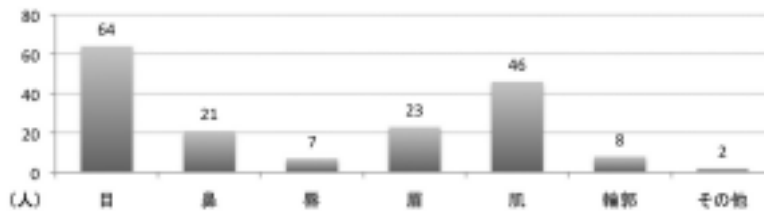


Figure 4 メイクテクニックを知りたい部分

Figure 4には、メイクのテクニックを知りたい部分に関する選択結果を示した (複数回答可)。最上位は「目 (76.2%)」であり、「肌 (54.8%)」、「眉 (27.4%)」、「鼻 (25.0%)」の順で多く選択された。メイクは悩みを解消する一方法として活用されることが予想されるが、本結果では前掲の顔の悩みを持つ部分とメイク法を知りたい箇所とが一致していないことが特徴的であるといえる。鼻は最も悩みが抱かれる部分でありながら、メイクによってその悩みが解決されるとは思われていないようである。一方の目は、悩みが持たれやすい部分ではあるが、メイクのテクニックを知りたいとも思われており、化粧によって悩みを解消したり魅力的に演出したりすることが可能と捉えられていることが推測される。

3. 目と瞼に対する意識の変遷

人類学的な研究によれば、二つの系統が混血したことにより、現在の日本人の顔には二つの異なるタイプが存在するのだとされる⁶⁾。一つはモンゴル人などに代表される北方アジア系、もう一つはフィリピンやインドネシアに代表される南方アジア系である。北方アジア系の顔は、氷期の極寒の気候に適応的であったために受け継がれて来たもので、一重瞼や薄い唇、皮下脂肪が厚く平坦な顔表面といった特徴は、彫りの深い顔に比べて表面積が小さくなり、凍傷に強いというメリットがある。また、一重瞼については、雪に反射する光から目を守るという機能も指摘されている⁷⁾。一方の南方アジア系の顔は、二重瞼で唇が厚く、眉が太いという特徴を持つが、実はこの南方アジア系の人々の方がより古くから日本の地に住んでいたのだという。2300年程前に九州付近から北方アジア系の人々が侵入し、結果として日本人は両方の特徴を持つようになり、現在は北方系が7～8割、南方系が2～3割との報告もある。

この「7～8割」という比率から見ても、日本人の固有の顔、人種の典型の一つとして、一重瞼は捉えられて良さそうに思われる。白人種に対する顔情報の処理の方が他人種に比べて速いという、白人種優位効果、或いは他人種効果といった現象も報告されているが⁸⁾、好ましきという観点でも、白人種と他人種の影響が指摘されている。日本人が1860年に最初の使節をアメリカに派遣した際、西洋の女性の目は「犬の目」のようで、「気を滅入らせる」と報告したという⁹⁾。少なくとも当時は、西洋人のような目は憧れの対象とはなっておらず、嫌悪感すら抱かれていたのである。つまり、白人種の顔の持つ特徴の方が好まれ、他人種のそれは受け入れられにくかったと言える。

しかし、それから50年程後の明治末期（1908年）の書物『欧米最新美容法』では、そうした評価は逆転する。日本人の目に対して、「眼球が飛び出たやうな眼又は瞼の腫れ上がったやうな眼」との記述が登場し、日本人の容貌が欧米人に比べて劣っていることを指摘するようになっていく⁹⁾。更に、大正から昭和に入る頃になると、切れ長の目から二重でぱっちりとした目へと美の基準がシフトし始め、婦人誌にも目を大きくはっきりと見せる化粧法に関する詳述が見られるまでになる。また、女優を「日本の美人」「エキゾチック美人」のように細かく分類する流れも生まれ、そうした中で二重瞼も美の一つの方向性として示されるようになっていく¹⁰⁾。

このように、目と瞼に関する価値観は、明治から大正時代にかけて大きな転換期を迎えたものと考えられる。前項の調査結果に見られるような二重瞼を理想的とする意識は然程古いものではなく、まだ100年余りの歴史しかないのである。

こうした全体の流れの背景として捉えておくべきは、①西洋文化の流入、②西洋に対する畏怖と劣等感、③情報媒体の変化の三点である。これらのどれが欠けても、現在に至る二重瞼への傾倒はここまで強固なものとはならなかったであろう。文明開化によって西洋文化が流入しても、西洋に対する畏怖や劣等感がなければ従来の価値観が優位を占めたであろうし、劣等感があつたとしても、情報を伝える媒体が浮世絵版画のような描かれたものであれば、何らかの意図的な加工がなされ、従来の価値観の流布が強化されたかもしれない。現実を忠実に映し出す媒体が使われるようになったからこそ、目に対する美的価値観に大きな変化が起こったものとも推測される。更に、いくら写真技術が発展したとしても、西洋文化が勢いよく流れ込んでくる状況でなければ、切れ長の目の女性が伝統的美人として紹介されるのみに終始し、価値観の変化のうねりは起こらなかった可能性が高い。

では、当時とは比較にならない程情報の伝達手段が発達し、多様な価値観が受け入れられている現代において、先のような偏った二重瞼礼讃を牽引しているものは何なのであろうか。第一項で示したような、東洋的でミステリアスな美しさを一重瞼に求める気配が見られないのは何故であろうか。その要因の一つとして考えられるのは、成熟した美しさよりも未成熟なかわいらしさを尊ぶ現代の見方である。女兒向けの人形一つをとっても、日本と諸外国では大きく異なる。同じ年代に向けられた人形であるにも拘らず、日本のものは子どもらしい可愛らしさを湛えており、アメリカのものは成熟した大人の魅力を放っている¹⁰⁾。この事実我代表されるように、幼さや可愛らしさを求める意識は日本全体を覆っているといえよう。現代の女性達が二重瞼に対して絶対的に肯定的な見方を示すのは、二重瞼そのものを欲しているからではなく、二重瞼によって目が大きくはっきりとして、よりかわいく見えると盲目的に信じているからこそと思われる。目が大きいことは乳幼児の顔の特徴、いわゆる「ベビー図式」の一つであり、未成熟のサインでもある⁴⁾。現代の若い女性達は、二重瞼が大きな目に欠かせないものと捉え、その二重瞼を以てかわいらしさ、幼さを演出しようとしていることが推測される。

4. おわりに

本稿で紹介した調査においては、極端に偏った意識が顕著に示された。今後の課題は、この意識の傾向についてより詳細に調べることであり、その偏りを正していくことでもある。

現在の流行のメイクはまさに目の印象をより強くするものである。つけまつげやマスカラは今

や欠かせないアイテムともなっている。確かに目の印象は強くなる。だが、逆にその人自身の個性は化粧の下に埋もれている現実がある。目にも脛にも注目が集まる今だからこそ、様々な個性、様々な価値観が存在して良いことを知らせていくべきであろう。目と脛という、ただそれだけのことではあるが、ここには「それだけ」とは言い得ない程の問題が含まれていると思われる。

参考文献

- 1) 吉川左紀子 (1999) 顔を知るルール. 大「顔」展図録 (村澤博人・馬場悠男・橋本周司・原島博・大坊郁夫 編, 読売新聞社: 東京), 102-104.
- 2) 山田雅子 (2009) 美的価値観における外見と内面—女子短大生が抱く美しさの構造—. 埼玉女子短期大学紀要, 20, 79-91.
- 3) 大坊郁夫 (1991) 容貌の構造的特徴と対人魅力. 化粧文化, 24, 55-68.
- 4) Cunninham, M. R. (1986) Measuring of the physical in physical attractiveness: Quasiexperiments on the sociobiology of female beauty. *Journal of Personality and Social Psychology*, 50, 925-935.
- 5) 柄原きみえ・斉藤一枝・水口綾子・池田恵子 (1979) 被服の着想効果と顔の形態的因子との関係についての研究 (第1報). 名古屋女子大学紀要, 25, 1-12.
- 6) 馬場悠男 (1999) 縄文顔と弥生顔. 大「顔」展図録 (村澤博人・馬場悠男・橋本周司・原島博・大坊郁夫 編, 読売新聞社: 東京), 43-43.
- 7) Etcoff, N. (1999) *Survival of The Prettiest The Science of Beauty*, Doubleday: New York (木村博江 訳 (2000) なぜ美人ばかりが得をするのか, 草思社: 東京)
- 8) Valentine, T. & Endo, M. (1992) Towards an exemplar model of face processing: The effects of race and distinctiveness. *The Quarterly Journal of Experimental Psychology*, 44A, 671-703.
- 9) 村澤博人 (2001) 化粧の文化誌. 化粧行動の社会心理学 (高木修 監修・大坊郁夫 編, 北大路書房: 京都), 48-63.
- 10) 村澤博人 (1992) 顔の文化誌, 東書選書: 東京